

だが、新病巣も出現せず、2年後に肝右三区域切除を行った。残肝再発を来た更に化学療法メニューを変えて行い、最終的には4年10カ月で死亡した。在宅率は88.9%であった。

22) 胃全摘術後の胸部食道癌切除2例の経験

矢島 和人・田邊 匡
中川 悟・大日方一夫
神田 達夫・西巻 正 (新潟大学医学部)
鈴木 力・畠山 勝義 (第一外科)

胃全摘後の食道癌切除例の報告は比較的多いが、胃全摘後の食道癌切除例は稀である。今回我々は、胃全摘術後に発症した胸部食道癌に対して、2例の切除例を経験した。

症例1 ; 70歳男性. 1988年5月30日に胃癌対し脾合併胃全摘, Reux-en-Y 施行. 1997年1月食道癌 [Im] の診断を受け, 開胸食道切除, 結腸間置術施行した。

症例2 ; 66歳男性. 1989年12月25日に胃癌に対して脾脾合併胃全摘, Reux-en-Y 施行. 1998年2月食道癌 [Im] の診断を受け, 非開胸食道切除, 回結腸間置術施行した。

胃全摘後の食道癌は、癒着剥離や再建臓器の選択等の問題を有するものの、切除、郭清に支障はないと考えられる。

II. 特別講演

「腫瘍発生・進展に関わる分子機構」

熊本大学医学部腫瘍医学教室教授

佐谷秀行先生

第5回 DIC 研究会

日 時 平成10年6月26日(金)
午後6:20より
場 所 新潟東映ホテル
2階 朱鷺の間

I. 一般演題

- 1) 経頭蓋超音波検査から見た体外循環実験におけるヘパリン、アルガトロバンの効果

劉 維・榛沢 和彦
大関 一・林 純一 (新潟大学第二外科)
古井 英介 (金沢大学神経内科)

【目的】経頭蓋超音波検査 (TCD) により脳血管内の微小血栓が High Intensity Signals (HITS) として検出できることが報告されている。そこで、我々は動物実験において TCD による HITS がヘパリン、アルガトロバン等の抗凝固療法で減少するか否か検討した。

【方法】豚6頭を用いて肺動脈と上行大動脈にカニューレーションを行い、膜型人工肺とローラーポンプを用いた部分体外循環を無ヘパリンで行った。HITS は TC 2020 (Nicolet/EME), 2.0 MHz パルスドップラーを用いて眼球上にプローブを固定して深さ50-60mmの脳動脈にサンプルボリュームをおいて測定した。無ヘパリンで体外循環を15-30分間行い、HITS が多数検出されてきた時点でヘパリン、アルガトロバンを点滴静注して HITS 数の変化を観察した。

【結果】無ヘパリン下における体外循環では平均 49 ± 35 個/10分 ($n=6$) の HITS が検出され、ヘパリンを 60 IU/kg 投与後では 4 ± 4 個/10分 ($n=6$)、アルガトロバン 1.2 mg/kg 投与後では 7 ± 7 個/10分 ($n=6$) とそれぞれ有意に HITS 数が減少した ($p < 0.001$)。また、ヘパリン投与後ではプロタミンの投与により再び HITS 数が増加した。

【考察】人工肺を用いた体外循環では抗凝固療法無しでは微小血栓が生じるものと考えられる。今回の結果は TCD による HITS が血管内における微小血栓の存在や抗凝固療法の程度を血栓からの反射シグナルという直接的な形で反映している可能性が示唆された。